



よさこい鳴子踊りの進化論(7) : 町内会・商店街 チームの展開

岩井, 正浩

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(2):147-156

(Issue Date)

2009-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001026>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001026>



よさこい鳴子踊り進化論 (7) : 町内会・商店街チームの展開

The Evolution of *Yosakoi Naruko Dance* (7) : Development of the town association and the shopping district teams Kochi city、JAPAN

岩 井 正 浩 *
Masahiro IWAI

The 55th Yosakoi Matsuri in 2008 of Kochi city, Japan, was attended by 192 dancing teams and about 19,000 performers. This year, I got on board a Jikata-sha (the lead coach – a fully decorated festival float – with accompanist and public address system) of 'Kamimachi Yosakoi Narukoren' team which is my third on-boarding experience. While, it is the second time when I got on Jikata-sha belonging to the same team as mentioned above.

Yosakoi Matsuri is made up of various town associations and the shopping districts. So in this paper I report about the evolution of '*Yosakoi Naruko Dance*' based on the town association and the shopping district teams.

(1) はじめに

2008年の第55回よさこい祭りは、過去最高の192チーム、19,000人の踊り子が参加した。今回は「上町よさこい鳴子連」チーム（以下、チームを省略）の地方車に搭乗した。地方車搭乗は3度目だが、このチームは3年振り2度目となった。スケジュールは以下の通りである。

8月9日＝前夜祭（中央公園）

8月10・11日＝本祭（帯屋町筋アーケード、15の競演場・演舞場・追手筋本部競演場）

8月12日＝全国大会（高知城、追手筋、帯屋町、中央公園）。後夜祭（中央公園）

全国大会に出場した県外チームは45、それに特別出演として「東京ディズニーランドドリームダンサーズ」が参加した。（括弧内は2006年度）

北海道＝1(1)／東北＝1(2)／関東・東京＝9(9)／中部・北陸＝8(8)／近畿＝8(9)／中国＝7(6)／四国＝7(6)／九州＝4(4)／沖縄＝0(1)

よさこい祭りは15の競演場・演舞場で2日間、県内外のチームを招いて繰り広げられた。競演場では、「地区競演場連合会奨励賞」と「地区競演場連合会地方車奨励賞」を設けている。55回の歴史を持つよさこい祭りは、町内会・商店街の献身的な努力による活動により支えられてきた。本稿は町内会・商店街によるよさこい祭りへの取り組み、チームの展開についての論考である。（註1）

(2) 2008年度「上町よさこい鳴子連地方車」から

2008年度も、第52回大会（2005年）に続いて「上町よさこい鳴子連」の地方車に搭乗させていただき、町内会・商店街チームの活動を観察する機会を持つことができた。8月7日は高知放送の取材を兼ねて地方車制作現場を訪問した。地方車は昨年のJRガードでの衝突・傷害事故で、高さ制限が新たに設定され、それを踏まえて制作されている途中であった。（註2）以下は調査日誌である。

8月10日（日）

8月8日には、前日収録した高知放送『よさこいの魅力』が放映された。『よさこい読本』と耳栓を購入し、上町に向う。「上町よさこい鳴子連」の出陣は12時30分だと聞き及んでいたが、実際には早まって12時15分には出陣体制を整えていた。早速、上町責任者である村田久太郎商店に自転車を預け、合田国生氏から上町の上着を受け取り乗り込む。合田氏は、3年前と同じく地方での先導役だ。相方は地方制作し、運行時にフラフ（flag）を担当している和田浩幸氏の娘で、「上町よさこい鳴子連」における年齢上限の中学3年生まで踊っていて、その後「とらつく」で踊っている。振付師は今年も時久紀恵氏で、本番でも先導役を担っている。

地方車は高さを低くするだけでなく2階構成の1階部分も低くなったこと、競演場への移動中は上部に上がらないこと、アルコール類は外部に見えない範囲で飲むことなどが規制として新たに設定されていた。友人達から「地方車への乗り込みが困難になった」旨を聞いていたが、これは各チームが地方車での行動に制約を感じて

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

（2008年9月1日 受付）
（2009年1月16日 受理）

きていたためだったのかもしれない。今年の「上町よさこい鳴子連」の地方車は、昨年から内部には冷房装置が付き、3年前とは比べものにならないほど快適であった。

今年は過去最大の参加人数となっていたためか、競演場での待ち時間は予測をはるかに超えていた。上町競演場から次に向った梅ノ辻競演場では、なんと2時間待ちであった。審査員席の岡崎誠也市長、責任者の榎本正巳氏に挨拶。この待ち時間を利用して他チームの調査を行う。次は愛宕競演場へ。ここでも1時間半の待ち時間。母校「学芸高校」に出会う。このチームもスタッフ集めと資金調達に苦労していた。資金は昨年5～600万円、今年は380万円かかっている。踊り子は130名、OBは3～4割であとは子ども・友人で構成。PAは大阪から調達し、楽器は様々なジャンルで編成している。

16時35分～17時05分、夕食のため城西館へ。ここで一踊りし館内で夕食。同じテーブル席の女の子は中学3年生で、香北町から1時間半かけて練習に参加していた。きっかけはネットでの情報であったと語っていた。男子が1名いることに気がついた。勇気ある男の子だ。17時25分、ホテルを出発して追手筋本部競演場へ。「本丁筋」の岡崎直温氏、「帯屋町筋」の広末幸彦氏、曾我佳正氏に挨拶。19時45分～20時05分の演舞、ライトに映えたパフォーマンスは美しかった。今年の振付は女の子らしく可愛い。ただ終点地点では踊り子達が抱き合っていて泣いている。感動のためかと思ったらそうでもなく、先頭近くにいるのにメダルをなかなか貰えないことに対する悔しさのようだ。

続いて万々競演場、ここも愛宕競演場に負けなくらい、いやそれ以上に長い街路ステージ。JR土讃線が高架になったので踏切での中断はなくなった。しかしバスが来ると4列から2列になり片側に寄って踊るという態勢は変わらない。今日は4箇所ではしか踊れなかったが、それは出場チームが多くなったためか。改善策として競演場・演舞場の増設が浮上しているのだが、なかなか困難なようだ。よさこい祭りを支えているのはまさに町内会・商店街、競演場・演舞場なのだ。21時15分、本拠地・上町に帰着し解散。

8月11日(月)

午前中は市内で各チームを観賞し、14時40分に追手筋本部競演場へ行き、「上町よさこい鳴子連」の地方車に乗り込む。出演待機中の「四国銀行」は例年通り1日参加で、今年は2日目に踊っている。仕事の都合上、このような参加スタイルもあるのだ。正調音楽・踊り、そして菅笠・浴衣すがたの女子行員はさすがにいい。

追手筋本部競演場は10本の本部表彰を設けている会場で、各チーム、各踊り子たちにとっての最大のパフォーマンス・ステージだ。各チームは審査会場中央分離帯の植え込みをはさんで北と南の道路を4列縦隊で行進する。審査会場であると共に、テレビ中継の場でもある。地方車上部に陣取った先導役は、眼下で踊る100名以上の踊り子たちの最後部まで音楽と声援を届けるために、PAのボリュームを上げ、マイクを握り熱烈にあおりたてる。踊り子たちは数席の観客と審査員、そしてテレビ中継のカメラに向かって笑顔をつりまきながら、大一番のパフォーマンスを繰り広げる。

「上町よさこい鳴子連」は、15時20分より本部競演場で精一杯の審査パフォーマンスを終え、高知城門で記念撮影をした後、帯屋町筋演舞場へ移動した。アーケードいっぱいに広がり、観客の声援や扇ぐうちわに勇気付けられ、感動をおぼえつつ、30分弱かけ550

メートルを踊り切る。ここでは地方車から降りて歩きながら調査。観客はカメラを構え、地方車の上の2人の先導役にも熱い視線を送っている。地方車の上で先導するスタッフは、いわばチームの顔であり、モデルでもある。「上町よさこい鳴子連」に対する印象も高感度だ。16時50分、アーケードを踊りきったところで今日の調査を終了した。

実は深夜からの「よさこい打ち上げ」を、作曲家の三谷章一氏から誘われていたが、歯痛と疲れで断念。19時からのはりまや橋演舞場でのサンサンテレビ中継を見る。はりまや橋演舞場の小松正幹氏は商店街役員とよさこい祭り役員を今年で降りたと語っていた。よさこい祭りの立ち上げ時からの功労に感謝する。

8月12日(火)

「上町よさこい鳴子連」は審査員特別賞を受賞する。大賞は今年も「ほにや」であった。高知城内特設ステージでの『全国大会』を観賞する。街路ステージでは、特別出演として「東京ディズニーランドドリームダンサーズ」の他、45チームが高知へ大挙訪れている。これらの中には、各地域での祭りに参加、さらに受賞したオフィシャルチームも参加してきている。高知はよさこい祭りのメッカとしての役割を果たしてきている。

町内会と商店街とは活動が違っているところも多々ある。中でも梅ノ辻の活動は注目に値する。そして学校レベルや子ども会チームの活動(チーム数、参加子ども数、練習プロセスなど)は、よさこい祭りを捉える上で必要な視点だ。また、『よしや節』や『豪気節』の登場など、土佐の歴史に基づく歌詞、『よさこい節』の替え歌、生演奏の実態、『よさこい節』や『よさこい鳴子踊り』がどのように取り込まれているかという視点もある。

その後、ホテルでデポしていた荷物を受け取り高知駅へ。移動のための特急列車の車中で宿毛市に帰省するよさこい祭りの踊り子と同席した。彼女は県外にも出ていたが、踊りも堪能できるし住みやすく高知が一番だという。よさこい祭りには多くの人々との出会いが生れる。そして閉塞感漂う現代において、人間と人間の生の交流、思い切り自己表現をするというすがすがしさ、常に新しい表現を求め、自由・開放的な祭りが今日のよさこい祭りを支えている。今年は珍しく大会中に雨に見舞われなかった。そして全国大会で「上町よさこい鳴子連」は第10回特別賞「翔」をも受賞した。

(3) 地域を軸とした子ども会チーム

高知よさこい祭りは幅広い世代によって演出されている。中でも子ども会チームの存在はよさこい祭りを市民に認知させ、将来的によさこい祭りを支える予備軍ともなっている。

特筆される点は、子ども会チームは地域単位もしくは広域の子どもを対象として組織されていること、子ども時代から音楽、踊り、衣装、メイクなどの体験を持つと共に、毎年更新される音楽、踊り、衣装、メイクを、つまりアップデートな体験をパフォーマーとして、観客として持つという機会を享受していることである。

第55回大会に出場した中学校以下の子ども会チームは、親子や大人との混成チームを除いても31チームにおよぶ。出場回数20回以上は、皆勤の「上町よさこい鳴子連」を筆頭に12チームを数えている。

【資料①：第55回大会参加子どもチーム】巻末

つまり幼稚園や町内会、商店街チームとともに、＜子ども会＞としての参加チームが少なくない。これはコミュニティとしてのよさこい祭りへの取り組みといえる。30回を迎えた「高知市子ども会連合会」を筆頭に「五台山子ども会踊り子隊」(18回)、「大津子ども会よさこいなるこ踊り子隊」(22回)、また学校レベルとして「Minami風-南海中学校」(7回)、「旭中学校踊り子隊」(6回)、障害者チームとして「日高養護学校にこにこ隊」(6回)、「き・ら・り」(6回)、そして市外からも「安芸子ども会連合会」(17回)や「枝川土曜子ども会」(9回)などがある。さらに今回からの「香南市子どもよさこい連合会」が初出場している。

子ども会チーム、町内会・商店街チーム、そして親子や大人との混成チームが果たしている効果は計り知れない。それは大人・親と子どもとのスキンシップであり、地域の教育力の回復である。他人の子どもに対しても、さまざまなことがらを教え、導き、ともに創り出していくという体験を積んでいることだ。集団でのパフォーマンスの喜び、難しさ、困難を祭りという場で体験していることだ。そこは音楽、踊り、衣装、メイクなどを学ぶ現場でもある。高知市の子どもたちが早期にメイクに関心を持ち始めるのも頷ける。

(4) 町内会チーム「梅乃連（梅ノ辻町内会踊り子連）」の活動

以前、梅ヶ辻（うめがつじ）と発音していた鏡川の南に位置する梅ノ辻は、よさこい祭りにおける貴重な町内会チームとして活動してきている。

梅ノ辻におけるよさこい祭りへの取り組みについては、2005年9月16日に榎本正巳氏との対談で明らかにしている。（註3）今回は第2回目となるが、町内会の活動とよさこい祭りへの取り組みについて、榎本正巳壮年部副部長の他に吉岡常夫壮年部部長、北村元身梅ノ辻町内会副会長に参加をお願いし、2008年9月16日に対談させていただいた。

梅ノ辻は競演場を持つと共に、「梅乃連（梅ノ辻町内会踊り子連）」という踊り子チームを第1回大会から立ち上げ、2008年で44回出場を果たしている。募集は80名、これはバス移動のキャパシティを考慮した人数である。対象年齢は小学生以上で、参加費は17,000円（ただし3年生以下は親子ペアでの参加となり28,000円）である。チーム名称は女の子の希望で現在の名称に変更している。練習は7月に入ってから始めている。全てが手作りで、衣装も奥さん達で作っていたが、しんどくなったので現在は施設の方に依頼して制作してもらっている。以下①-⑦は筆者の質問に対するご回答である。

①「商店街の戦略について」

（岩井）高知市では大型ショッピングセンターが商店街とは離れた地域に置かれている。商店街としての相乗効果や付加価値に大きなマイナス要素を生じさせてきていることは全国的にも認知されている。高知の商店街もそのために苦闘していると聞き及んでいるが。

アーケード商店街である帯屋町は、昔は大型店に反対していたが現在は隣接を望んでいる。商店街に人が集まらなくなり、人が通らなくなった。梅ノ辻は歯抜け状態ではないが、歯抜け状態が生じてきていることへの危機意識がある。ただ、商店街側にも努力する必要がある。それは住民が商店街に住まなくなっていることに対してである。朝の開店は遅いし夜の閉店は早い。そのため買いに行くところがコンビニ（convenience store）しかなくなった。タバコ

にしても地元に残らないし、コンビニ資本は県外だから県内が潤わなくなり悪循環になってきている。コンビニが商店街を駄目にしたとも言える。（岩井註：実際、高知市に旅行した県外客から私自身も直接その実情を語ってもらっている。）

商店街側が、場当たりの客が来ればよいという考え方だけではだめで、きちんとしたポリシーが必要である。以前は主だった商店街とよさこい祭りの考え方とは一致していた。その当時よさこい祭り加わらなかった商店街もあったが、現在はそれらの商店街がどうみているか、ということも確認してみたい。以前の商店街は長屋みたいな状態で地域に密着していた。しかし現在、商店街は生活の場でなくなってきたし、儲けることが目標になりすぎている。そのため若者は県外に出たほうが儲かるという考えを持って出て行く。商店街側の努力も必要だが、許容の限度がある。地元に住んでおれば地元で買おうということになる。安けりゃよいということで地元の商店で買わずに安いところを追いかけて行くのではなく、住んでいたら顔が見えて付き合いがあるから地元で買おうということになる。商売する上では人と付き合うことが必要で、それがあれば少々高くても地元で買う。しかし日頃の付き合いがなくなって商売のみになってくると、「安さ」というキーワードで住民は行動するようになる。

よさこい祭りに人が出てきてくれないのは日頃の付き合いがないからである。あれば仕方なくても出てくる。梅ノ辻も人付き合いを考えなくなって来た頃から人が足りなくなり、商店街では無理となって町内会主催となった。つまり梅ノ辻の場合はたまたまうまく変化してきた。始まったころは一応商店街らしく80～90万円くらいでやっていた。そして今日は1世代かわっている。当時学生だった私達は、たまたま地元へ帰ってこいということで帰って商売をしていた。そして手伝ってくれとの依頼でまたよさこいに関わるようになり、地元で続けてやっていた人たちから教えてもらった。元々は商売をしていた人たちがイベントとして立ち上げた祭りだったが、現在は＜祭り＞として受け継いでいる。金儲けとしてしまうとそれなりのことしかできない。

それぞれ人には個性があり考え方も違い、思い通りに動かないから人間は面白い。今の人はこれをうるさいと思っている。いつそこに返ってくるかはわからないけれど、しんどい思いをしたらそれなりの何かがあると思う。「あんたの子どもはようやりよったぜよ」と他人が子どもについて語ってくれる。それは良い環境で、それが祭りである。これだけ大きな祭りになれば金儲けが出来るかもしれない。立ち回り方によればビルでも立つかも知れないけれど、本当の祭りはやはり金儲けではない。祭りを立ち上げた人と受け取った人の気持ちがいずれ違ふと、言葉でいくら言ってもその言葉を受け取る人間の環境によってぜんぜん意味が違ってくる。

梅ノ辻の人たちは小さいときから踊っているから踊ることが当たり前になっている。夏になったら踊るということになっているから特段何ともない。自然な格好で受け継がれてきているので誰も悩んではない。祭りだから祭りを商売にしたらいけないが、次第に高知のよさこい祭りもそのようになってきている気がする。私達は県外に出たら金持ちになっていたかもしれない。しかしここ地元でそれなりの生活はできているし、これでよいと思っている。

②「町内会チームの活動について」

（岩井）他人の子どもに対してものが言え、子どもの行動が把握できる地域が存在しなくなっている現今、梅ノ

辻の町内会での子どもへの取り組みがうまく機能しているようだが。

それは自然とそうになる。町内の子どもが何年生になったかなどと話が出てくる。それはよさこい祭りだけではなくて町内会組織があるからで、運動会などは子どもが一緒にいたいものだから。商店街チームの踊り子さんたちは、よさこいだけです。日頃の付き合いが梅ノ辻では密かもしれない。

(岩井) 町内会・商店街チームの祭りへの参加について、中断後に復活したり、断絶したりするチームがある。チームの立ち上げ・維持には大変な苦労があると思われるが。

今から何年も前には町内で踊り子が20人以上もいたが今は減少している。そのため潮江地区や土佐市からも募集者を入れている。それはそれでまた人とのつながりが出来てよい。そういうところを見ると、子どもが地元におればそれに越したことはないけれど、大人になって外へ出て行くといった現実もある。だから続いていけるかどうかは未知数である。やれるだけやって後を受け継ぐ人間がおればそれに渡したいのだが。いないのであれば無理やり続けるよりはパッと止めたほうが良いのかもしれないといったようなことも思う。ただそれをしてた付き合いがなくなっていくこともあり、よいのかどうかは難しい。

③「祭りに関する予算・運営について」

(岩井) 祭りには随分と費用がかかると聞いている。特に町内会では寄付金に依存している中で、競演場を設営し、チームの踊り子を接待し、そして自分達のチームを立ち上げているが、その費用・運営について。

祭りに対してもっと資金的応援があつていいと思う。現在の援助は45万円。主催者は競演場を止められたら困るから援助していると思われるが、少ない。

競演場で待ち時間がかかるのは、舞台で踊るカタチをとるYOSAKOIソーランの影響である。中央公園演舞場の舞台には大変な金額をかけて設営している。せっかく追手筋本部競演場があるのだから、そこで前夜祭・後夜祭4日間使用したらよいのではないか。そうしたらよさこい祭りの原則である前進するストリートの踊りとなり費用も少なくてすむ。

④「祭りの原則について」

(岩井) 高知よさこい祭りは3つの原則として《よさこい節》の一部を音楽に入れる、両手に鳴子持つ、そして前進演舞をする、とあるのだが。

YOSAKOIソーランのカタチを取り入れるからいけない。高知は高知のストリート踊りが原則だから、お金をかけてまで中央公園演舞場でやるのはどうかと思う。その費用を各競演場にもっと回して欲しい。中央公園演舞場の待ち時間は2時間以上もかかっている。高知はストリート踊りの祭りであり、札幌はイベント、これを一緒にしたらいけない。

私達が小さいときは、田舎の盆踊の形で櫓の上で審査をやっていた。現在は櫓を建てる馬力も資金もないが以前はそうであった。現在櫓を組んで上から審査しているのは追手筋本部競演場だけだ。祭りに興味がある人が運営をしていかないと無理で、結局、儲ける人

が出てきたから祭りがおかしくなり、半分イベントみたいになってきた。よさこい祭りで儲けてやろうと言う人たちは、「こりゃよさこいは儲けになる！」と思って全国各地によさこい系祭りを立ち上げた。

⑤「よさこい祭りについて」

(岩井) 企業チームの「四国銀行」などは1日しか参加しない。

賞をねらっているわけでもなく、女子行員の下駄の鼻緒を男子行員が締めるという伝統が今でも続いている。

梅ノ辻は町内で祭りを作っているわけで、企業は企業で自分の会社の祭りであつて、会場に来て「うちの祭りを見てください」、それでバランスが取れている。宣伝であろうがなんであろうが自分達のカラーを出して他の所へ挨拶に行く、祭りを見せに行く。見せてもらったらお返しにこちらも見せに来る、その相互の流れという状態で続いていったら良いと思っている。

梅ノ辻のよさこい祭り経費は400万円ほどで、そのうち寄付を250～60万集めないといけない。そのため町内を回り1,000円単位から寄付金を集めている。何万円もくれるところもあれば、1,000円のところもある。最近はその活動も次第にしんどくなってきている。主催者がイベントにならないようにし、もう少し各競演場へ補助をしてくれたら運営しやすくなるのだが。各競演場に100万円補助しても10会場で1,000万円ですから。よさこい祭りの予算総額は8,000万円、そして各チームから参加料を5万円徴収している。参加料だけでも1,000万円集まっている計算になる。ただ県外チームからは取っていないかもしれないが。よさこい祭振興会から45万円の補助をもらっているが、参加料5万円、「どこいこサービス」で5万円、メダル代(1,200個)で2～3万円、そして飲料水・接待料(お茶、レモン水、梅干)だけでも10数万円、さらに会場設置費も必要だ。競演場への来場チームは今年(2008年度)で第1日目85チーム、第2日目95チームの2日間合計で180チームであった。2度来るチームもある。それはストリートが広いから踊り易いということや、ここを集合場所にしているためでもある。本番当日は朝9時から競演場を持たないチームが並んでいる。12時過ぎにはすでに15～20チームも来ている。本来は12時半踊り始めだが、梅ノ辻は他の競演場・演舞場が高知署ではなく、唯一高知南署管轄なのでお願いに行き、12時開始の承諾をとっている。待ち時間が長いという実情を解決するためには、競演場を増やすかチームを選別するかのどちらかを考慮しなくてはならなくなってきている。しかしチームを選別するのは祭りの趣旨に反する。私達は踊りたいチームは来たらよいと思っているが、会場が限られているから容量的に難しくなっている。それと前夜祭と後夜祭、さまざまな賞にも費用をそれほどかけなくて良いのではないだろうか。

⑥「よさこい祭りの運営について」

(岩井) 賞をつくるのであれば、ジャンル別に、つまり町内会・企業・クラブや子ども・学生・大人チームといったと思うのだが。「上町よさこい鳴子連」は子どもが美容院に行かなくてもよいように帽子をかぶっている。

受賞は最初から皆あきらめていますね。賞を取るチームはほぼ決まっている。よさこい祭りが始まる前に踊り子に聞いたらすぐわかる。美容院に何日予約しているか。私達のチームは大抵2日ですが、4日というチームは、「あ！それは前夜祭・後夜祭に出るチームだな」

というふうに判別できる。

踊り子の負担を節減するためだとしたら、「上町よさこい鳴子連」は当然の措置です。私達は競演場も入れて460万円で運営している。地元で100チーム出たら4億円動いていることになる。それから別に小物や美容院などとなると結構な金額になる。地方車は町内で制作するので費用は半分ですんでいる。1番安い「市役所」の地方車がPAを入れて120万円、「梅ノ辻梅乃連（梅ノ辻町内会踊子連）」はPA入れて60万円、賞を狙っているチームはPA積んで250万かかっているのではないだろうか。これらも商売化している。よさこい祭りで使うPAの借入費が、四国・九州・中国・関西ですべて同じというのもおかしい。梅ノ辻は東京から運賃込みで来てもらってもだいぶん安い。どうして東京から来てもらってこんなに安くできるのか、1チームで20万円使ったら全チームですごい。一体誰が儲けているのか、よさこい祭りが商売になったらいけない。

地方車は建設センターから2週間借用している。仕事の関係上、土・日でないと作れないから。1台借りたらあとはランニングコストなので、そんなに高くにはならない。トラック・発電機・トイレなど全部借りて24万円。それを過度に商売化しなければグッと下がる。以前は、あるところでPA借りないとトラックも借りれないということもあった。トラックも上前はねてということになる。踊り子の移動にはバスをレンタルして行っている。時間運転で1時間1万数千円。他チームの中には地元では足りないので県内のバス会社が窓口になって県外から調達している。通常料金で普通にやっていることに対してはどうか言うことはないが、もしよさこい料金などがあるとしたらそれはおかしい。

⑦「梅ノ辻の年中活動について」

（岩井）梅ノ辻は、町内会チームを出しているが、前回の対談の時に町内会の年間行事の一環として位置づけていると言われていたが。

梅ノ辻は300世帯しかないが町内の活動は活発で、年間活動は以下の通りである。

4月：総会（宴会兼ねて、以前は花見もしていた）＝30～40名参加。

5月：よさこい第1回実行委員会（以後、何回か行う）

8月：よさこい祭り

9月：潮江小学校校区対抗ソフトボール大会＝青年部・壮年部

10月：町内（10校区）運動会＝小学生から高年部。夜にも運動会（懇親会）があり、子どもも含め60～70人参加。参加した人の賞品は全て集めて、婦人部が購入してきた景品を合わせて全員にいきわたるようにジャンケンして分け合う。

12月：餅つき＝子どもから高年部。子どもも餅をつく。年寄りが主役になる。

こういった付き合いがあるから、よさこい祭りにも人が集まりやすい。そして子どもがどこにいるかとか、老人が何をしているかを把握できる。よさこい祭りをきちんとやっていることが医療にも波及している。知り合いの往診専門の先生がいて、梅ノ辻の町内組織がしっかりしているということで在宅医療が始まろうとしている。お年寄りが退院して帰宅しないといけなくなったとき、どこの病院に通っていてもいい、入院していてもいい、そのときに内科、歯医

者、薬剤師さんが来てくれるという制度で、どこにお年寄りがいるかも把握できる。これは防災にもつながる。これにはまず名簿作りからしないといけない。梅ノ辻はそういった面ができてからモデルケースになろうとしている。そういうシステムが出来上がったら、今まで自分がお世話になった先生がそこへ登録してくれたら立ち上がることになる。

冠婚葬祭、結婚式については、付き合いがある人は行くし、区長、班長さんから連絡があれば、町内会から行く。町内会は班分けをしている。班長さんや区長さんが町内会から慰労金をもらってその班単位で行っている。結婚式は町内会が特に関与していない。

一番心配なのは、高年部に入っているお年寄りで、把握できるが、入っていないお年寄りを何とかしようと考えている。高年部の会長さんと話したけれど、大体検討はついてきている。新住民に対しては、まず町内会入会の誘いをする。しかしこれが難しい。アパート・マンション（賃貸）の場合はよほどみっちり行って話さないと難しい。一戸建ての場合は前住民との関係などからとつきやすく把握しやすいが。アパート・マンションの住民に関しては相手の出方次第といったところもある。そこらあたりを大々的に巻き込むことが出来ればよいのだが。

回覧で年中行事を流して参加をお願いする形をとっている。家庭持ちの人は割合話しやすいが、アパート・マンションは若い人が多くてなかなか難しい。特にゴミ収集などは困る。家主さんが話の分かる人だったらよいが。新しく出来たところは生ゴミも不燃物も全てマンションで管理しているから言えない。

以上のご回答から次のように要約できる。

梅ノ辻におけるよさこい祭りへの取り組みは、生活の一部であり、コミュニティの維持・活性化の中で自然に、しかも確実に位置づけられてきている。ただ、町内会活動をリードしてきた彼らも次第に高齢化してきている。さらに商業および居住スタイルが変化していく現実、町内での今後の展開を楽観視できない状況を呈してきているともいえる。今後のさらなる活動に注目したい。

【資料②：町内会・商店街（高知市内外）の歴史】 巻末

(5) 地域を軸としたチーム

55年のよさこい祭りには、地域を軸とした皆勤チームもあれば、途中で一時中断し復活したチーム、そして中止に追い込まれたチームもある。

【資料③：第55回大会参加地域チーム】 巻末

「菜園場“菜の笑”さ組」、「帯屋町筋」、「大橋通り踊り子隊」、「京町・新京橋“あびすしばてん連」、「万々商店街（万々歳）」、「あたごまち愛組氣炎一座」、「チーム升形（升形商店街）」はそれぞれの商店街、そして「梅乃連（梅ノ辻町内会踊子連）」は梅ノ辻町内会、「上町よさこい鳴子連」と「本丁筋踊り子隊」は上町町内会・商店街を軸としたチームである。前述の子ども会チームも地域（広域も含む）チームであり、地域のコミュニティ活動の中で重要な役割を果たしてきている。

よさこい祭りにおける15の競演場・演舞場は、資金的・人的課題を抱えながら灼熱の2日間、192チームを招聘している。競演場の最後の地点には「接待所」が設けられ、踊りきった踊り子たちに

飲み物を提供している。1 チームが 100 ～ 150 名という踊り子編成であるため、接待所には多くのボランティアが飲み物を提供する作業を行っている。その飲み物代だけでも、上町競演場を例に取れば 10 万円は下らない。

そして踊り子たちへのメダル授与がある。はりまや橋演舞場では、メダルを渡すのは、企業や町内会のお世話をさせていただいている方に審査員としてお願いしている。その基準は、踊りが上手、笑顔で楽しく、チーム全体の雰囲気、特異な衣装、工夫を凝らした衣装などとしている。そのメダル数は 1,500 個、1 チーム 10 個を目途に授与している。

升形競演場は、近年の運営総費用が約 160 ～ 170 万ほど、以前は競演会場の審査席、照明、場内アナウンスなど設営や飾り付け、地方車の組み上げ、飾り付け等もほとんど手作りで賄っていたし、交通整理や接待所なども多くの方々のお手伝いにより、人件費はほぼゼロであった。現在は商店主の高齢化や人手不足を解消するために、少なからぬ専門の交通警備員、また 1 日に 90 近いチーム来演への給水接待のため、10 名近い学生アルバイトを雇い、会場設営もよさこい関係者やイベント企画会社などをお願いするようになってきた。

また知寄町競演場は、スーパー・サニーマートが会場を提供してくれており、「サニグループよさこい踊り子隊」が本拠地としている。踊り開始は 1 時間早く 11 時、終了は地元配慮して 21 時、会場はテントを張り、椅子を並べ誰でも自由に観賞できるように設定している。スタッフは 1 丁目の町内 7 名、4 銀行支店から 8 名がボランティアとして関与し、審査にはサニーマートや銀行の支店長など 7 名に担当してもらっている。資金は 100 万円、そのうち 50 万円は町内からの寄付金、あとは看板などの広告代や飲み物などの寄付である。準備は 6 月に入って打ち合わせをする。ステージ費用はサニーマートが負担してくれている。

地区競演場での審査は、6 項目の基準で行われる。独自の賞である「地区競演場連合会奨励賞」は各競演場での審査に基づいて決定される。升形競演場の責任者である神田尚和氏は競演場の苦労について次のように語っている。

競演場・演舞場での演舞時間は、道路規制だけの問題ではない。とんでもない音量の問題があるので、終了時間だけは守るようにしていきたい。市民の 30% はよさこいの応援者、30% は好ましくないと思う方々、残りの 40% が理解はしてないが、反対はしないけれど積極的に応援するほどではないと思う。この 40% の方々を好ましくないと思わせないように、むしろ応援者に変えていくように、メディアも競演場関係者もチーム関係者も努力していくことが重要と思う。諦めのように「よさこいだから仕方ない」とか、2 日間だけだからと堪えていただいている。そっぽを向かれないように配慮も必要だ。各会場周辺からの苦情は、各来演チームが踊り子さんの移動に使う貸切バスの待機場所近くの交通渋滞等が一番多い。騒音と感じるか、音楽と感じるかの違いで音量の問題もある。(註 4)

〔資料④：よさこい祭り：高知市商店街および競演場・演舞場チームの変遷〕 巻末

地元チームの運営について、「本丁筋」を立ち上げた岡崎直温氏は次のように語っている。

2001 年にこの「上町よさこい鳴子連」の源流である「本丁筋」

という踊り子隊を立ち上げた。「上町よさこい鳴子連」が子どものチーム（小学 4 年生～中学 3 年生）なら、上町の大人のチームとしての「本丁筋」は、高校 1 年生からという線引きをしてチームを構成している。よさこい祭り開催当初は上町の町名が本丁筋ということで参加していたが、町名が変わったので上町に変わったという経緯もあり、37 年ぶりに坂本龍馬生誕地としての本丁筋という町名を残す意味合いもあってチーム名を復活させた。もう 1 つの目的は岡崎が仕掛けた原宿スーパーよさこいにこの名前で参加することでもあった。(註 5)

「本丁筋」は 3、4、5 丁目が第 1 回大会から次々と出場していた伝統を持つ。その後「上町よさこい鳴子連」と名称を替え、子ども主体のチームとして継続してきている。一方、同じ町内の「本丁筋」チームは、大人のチームとして第 48 回大会に初出場したが、第 1 回からの枝分かれした復活ともいえるチームである。

第 1 回大会から 38 回出場していた「中種」は第 41 回、43 回出場の「旭よさこい祭り実行委員会」も第 51 回大会で中止に追い込まれた。一方、「万々商店街振興組合」は第 41 回大会で中断後に復活、「升形商店街振興組合踊り子」も第 42 回大会で中断後復活するなど、町内会・商店街チームは、財政的・人的影響で盛衰を余儀なくされている。ただ復活したチームが財政的・人的に回復した結果だとは言いきれない。祭りへのあくなき願望が無理難題を克服し復活させている面もあると思われる。

(6) おわりに

今年の音楽は《よしや節》や《豪気節》など、土佐の伝統的な音楽を導入しているチームが多かった。(註 6) 《よしや節》は《よさこい節》の旋律で歌える歌詞だ。そして高知の子どもはさまざまな音楽・踊り・衣装・パフォーマンスを見・演じることを毎年体験してきている。中でも常に新しい表現を体験していることは大きい。また町内会・商店街におけるコミュニティの活性化と地域教育力も注目される。梅ノ辻は町内会でチームを作り、競演場を運営しているが、よさこい祭りを年中行事の一環として位置づけており、子どもたちに地域の教育力が大きく働いている。上町も一連の練習・祭りでの行動で、子どもに対するしつけをきちんと行っている。よさこい祭りは大人—子どもというタテ関係のつながりを成立（復活）させ、子ども同士も友達作りや楽しさ・悔しさを味わっている。そしてクラブチームでは、さまざまな＜出会い＞と友達関係が成立し、チームで 1 つの作品を作り出していくというプロセスと結果を体験している。よさこい祭りは単なる祭りではない。神事性はないが、伝統的な祭りに限りなく近い性格を有してきているといえる。

一方、デメリットもある。あの大きな音響は子ども達の耳を危うくする。静かで細やかな音、自然の音への傾聴が等閑視されるのではないかという思いにかられる。「上町よさこい鳴子連」の先頭を踊っていた中学生には耳栓をしていた子どもたちもいた。是非、地方車近くの踊り子達には耳栓を勧めたい。音楽の多様化はジャンルや民族だけではなく、音量の大小にも及ぶことが必要だ。それは十二平均律に縛られない音の世界、自然の音の世界が存在するという多様性の獲得だ。またダイナミックで全身からみなぎるようなエネルギーを発散させるパフォーマンスとともに、日本舞踊や沖縄舞踊の細やかで、静かな表現、腰・手・上半身の表現も重視したい。さらに過度にコンテスト化しないことも望みたい。町内会・商店街チームは財政的にも極めて苦境に立たされ、競演場の運営もままならな

い状況を呈してきている。そのため競演場の補助金を増額するなど、よさこい祭りの構造的課題を検討する時期に来ているのではないかとと思われる。それはよさこい祭りを高知市民の〈祭り〉として捉えるか、にかかっている。

学校教育で教えられないパフォーマンスの多様性は、社会における地域の教育力に頼らざるを得ない状態だ。しかしかつての日本人は、祭りで太鼓を叩き、笛を吹き、歌を歌い、踊りで身体表現をしてきた。そして世代を超えるタテ関係の教育システムを機能させてきた。よさこい祭りは、まさにその現代版を歩みつつある。年々、新しいパフォーマンスを生み出しつつ、スパイラルな回帰をしながら地域密着の祭りを創り上げてきている。一方的なコマーシャルペースや個人への権力集中化に陥ることなく、祭りを支える人々、なかんずく町内会・商店街は、地道で確実な地域づくりの活動を軸としてきた。そして祭りに無関心な人々、賛同できない市民を常に意識し、課題が生じたらさまざまな場で真摯に向き合い、克服する努力を通じ、祭りが開催される喜びを大切にしてきた。

よさこい祭りに参加する県外チームは、この最も暑い本場・高知で踊ろうという意識をもって参加している。これらの県外のチームもまた高知のよさこい祭りを支え、発展させてきている。彼らが『よさこい節』を歌い、自分達の地域の民謡を歌う姿によさこい祭りが日本全国に与えた影響のすばらしさを実感する。そしてその原点には、県外からの〈まれびと〉を招聘し、競演するために、高知市の町内会・商店街の並々ならぬ苦闘が続いてきている現実を確認しておかなければならない。

註1：岩井正浩『これが高知のよさこいだ！いごっそとハチキンたちの熱い夏』岩田書院 2006年 pp.163-167 参照

註2：「よさこい鳴子踊り進化論(5)：「上町」の地方車から」
神戸大学発達科学部研究紀要 13-2 2006年 pp.117-125

註3：「競演場・演舞場を持つ商店街・町内会チーム」
前述註1 pp.93-96

註4：「いごっそが陣取る地区競演場・演舞場」
前述註1 pp.81-87

註5：ibid., pp.71-75

註6：「よさこい鳴子踊り進化論(6)：「帯屋町」の地方車から」
神戸大学発達科学部研究紀要 14-2 2007年 pp.218-219

よさこい祭り関連文献（岩井正浩執筆）は以下の通りである。

「音楽行動としての祭り～現代人の癒し行動」神戸大学発達科学部研究紀要 5-2 1998年

「民俗芸能の視聴覚教材化に関する研究」科学研究費助成報告書
島印刷 1998年

「よさこい鳴子踊り進化論序説」神戸大学発達科学部紀要 8-2 2001年

「高知よさこい祭り」神戸大学発達科学部授業『民族音楽調査論』報告書 2001年

「よさこい鳴子踊り進化論(2)：2002年・高知」神戸大学発達科学部研究紀要 10-1 2003年

岩井正浩・他「エイサー・阿波踊り・よさこい祭りにおける民謡・民俗芸能の継承・創造の現代的展開」科学研究費助成報告書
島印刷 2003年

「よさこい祭りの国際化と正調の共存的進化」

『Musicology and Globalization』2002年

岩井正浩・他「よさこい鳴子踊り進化論(3)：第50回よさこい祭り」
神戸大学発達科学部研究紀要 12-1 2004年

「よさこい・そーらのダイナミズム」『Studies Forum Series 25』
中部高等学術研究所 2004年

「よさこい鳴子踊り進化論(4)：100回大会への序曲」
神戸大学発達科学部研究紀要 12-2 2005年

「よさこい鳴子踊り進化論(5)：「上町」の地方車から」
神戸大学発達科学部研究紀要 13-2 2006年

『これが高知のよさこいだ！いごっそとハチキンたちの熱い夏』岩田書院 2006年

「よさこい鳴子踊り進化論(6)：「帯屋町」の地方車から」
神戸大学発達科学部研究紀要 14-2 2007年

〔キーワード〕

①よさこい祭り ②よさこい鳴子踊り ③よさこい節 ④高知市 ⑤地方車 ⑥乱舞・群舞 ⑦パフォーミング・アーツ ⑧現代の都市の祭り ⑨上町よさこい鳴子連 ⑩梅乃連（梅ノ辻町内会踊子連）

〔資料①：第 55 回大会参加子どもチーム〕〔作成 岩井正浩〕

介良（KERA）踊り子隊	「棒打ち」を取り入れた新しい踊り。100 人。4 回
高知市子ども会連合会	3～6 年生 150 人。30 回
香南市こどもよさこい連合会	和風。90 人。初
五台山子ども会踊り子隊	90 人。18 回
菜園場“菜の笑”さ組	108 名。53 回
サニーグループよさこい踊り子隊	小中学生 123 人。26 回
シエロクラブ with 日本トリム	平均年齢 10 歳 100 人。2 回
ジュニアジムナスティッククラブ	機械体操を習う子ども達 80 人。12 回
須賀連ちびっこ隊	1 歳児も。ヒップホップ。150 人。9 回
杉の子 3 園ちびっこ隊	年長組になったら踊れる。150 人。24 回
高須子ども会	高須小学校児童 120 人。17 回
調布「跳乱舞」	調布市在住の小中学生。ロックに乗せたスピード感あふれるステップ。53 人。3 回
つくし（TUKUSHI）	県内の児童福祉施設の子ども達 95 人。29 回
安芸子ども会連合会	安芸市 5 つの子ども会。90 人。17 回
枝川土曜子ども会	枝川の農村歌舞伎「白浪五人男」をモチーフ。70 人。9 回
大津子ども会よさこいなるこ踊り子隊	90 人。22 回
学校法人平成学園（あとむ幼稚園 ひまわり幼稚園）踊り子隊	《よさこい節》を歌い、和太鼓とドラムを演奏。150 人。10 回
帯屋町筋ジュニア隊	70 人。21 回
学校法人沢田学園みさと幼稚園	100 人。28 回
学校法人土居学園	正調。104 人。30 回
学校法人みかづき学園みかづき第二幼稚園	沖縄のエイサーを取り入れた音楽。69 人。27 回
学校法人みかづき学園みかづき幼稚園	77 人。26 回
学校法人やまもも学園 桜井幼稚園 芸術学園幼稚園	親子でよさこい。150 人。17 回
認定こども園春の乳幼児保育園	111 人。7 回
日高養護学校にこにこ隊	お祭りマンボ。115 人。6 回
Minami 風—南海中学校	100 人。7 回
Club Risky	中高校生、激しい和太鼓、ヒップホップ。130 人。10 回
旭中学校踊り子隊	レゲエ。70 人。6 回
上町よさこい鳴子連	140 人。55 回
き・ら・り	星型鳴子。80 人。6 回
桜（高知中央高等学校）	土佐弁ラップ。110 人。5 回

〔資料②：町内会・商店街（高知市内外）の歴史〕〔作成 岩井正浩〕

* 基本的に初登場、およびチーム名変更を記載

* 高知新聞（30 回大会より「参加チーム紹介」開始）より転載〔（ ）内は出場回数〕

30 回（1983）	中種／安芸町連合子供会／安芸市井ノ口青年団／旭地区踊り子隊／おびさんロード／春野町青年団／上町（30）／升形（17）／梅ノ辻町内会（19）／菜園場商店街（25）／愛宕商店街振興組合（26）／京町・新京橋（30）／協同組合帯屋町筋（30）／万々商店街振興組合（15）／大橋通商店街振興組合（27）
31 回（1984）	春野町連合青年団／南帯屋町商店街振興組合／本山町さくらチーム／中種町内会／野市町踊り子隊／安芸市子供会連合会
32 回（1985）	旭踊り子隊／中種踊り子隊／土佐 4 H クラブ踊り子隊／新屋敷 2 丁目町内会
33 回（1986）	須崎地区 4 H クラブ踊り子隊／なかたね踊り子隊
34 回（1987）	帯屋町筋ちびっこ隊／野市町

35回(1988)	中種商店街踊り子隊
36回(1989)	旭よさこい祭り実行委員会／大津子ども会踊り子隊／鴨部すみれ子ども会／香美町連合青年団
37回(1990)	日高村連合青年団／ロマンチックコスモス越知／香美地区青年団／土佐山田「龍河温泉」
38回(1991)	おびさんロード商店街／中種商店街踊り子チーム／五台山校区こども会／安芸次世代会
39回(1992)	野市町踊り子隊／高須子ども会／安芸子ども会連合会／大津子ども会なるこおどり子隊
40回(1993)	なし
41回(1994)	山田太鼓
42回(1995)	なし
43回(1996)	土佐さめうら
44回(1997)	山田太鼓伝承会／高須子ども会連合会／安芸子ども会踊り子チーム
45回(1998)	春野&北海道連合チーム
46回(1999)	なし
47回(2000)	いの南元氣連(伊野南小学校PTA)／枝川(小)土曜子供会／安芸東陣／SUSAKI—4H—CLUB ／伊野・お城下で踊ろう会／高須地区三色水風穂(サイサイ)／安芸あいあい演奏農業改良／四郷 人／本丁筋
48回(2001)	安芸本町商店街東陣／吾北清龍／ハルノ四郷人
49回(2002)	安芸本町商店街東陣チーム
50回(2003)	梶原
51回(2004)	安芸東陣／おおとよ
52回(2005)	香我美小踊り子隊
53回(2006)	介良(KERA)踊り子隊／夏・ざっくばらん
54回(2008)	久礼分(くれもん)／本山さくら・土佐さめうら

〔資料③：第55大会参加地域チーム〕 〔作成 岩井正浩〕

本山さくら	チームを本山町の文化として伝える。90人。30回
梶原	津野山神楽の舞を取り入れた踊りで、梶原の山・川・文化を体現。160人。6回
ハルノ四郷人	春野町をアピール。90人。10回
夏・ざっくばらん	佐川町。70人。3回
おおとよ	元気な山のおきやくパワー。70人。5回
安芸東陣	よさこい随一の東陣太鼓でアップテンポの正調よさこい。125人。9回
しまんと結	四万十川のほとりのちいさな町や村の人間のあつまり。110人。初
総合クラブとさ	土佐市の地域住民110人。2回
日高環頭太鼓「風雅」	担ぎ太鼓ややぐら太鼓を打ち、日高村民パワーを。75人。初
山田太鼓	60人。16回
いきいき すこやか隊	高知市塚ノ原町内会主体のチーム。65人。4回

〔資料④よさこい祭り：高知市商店街および競演場・演舞場チームの変遷〕

*『よさこい祭り50年』、高知新聞「出場チーム紹介」より構成〔岩井正浩〕

第1回(1954)	玉水町／井口町晩市場／五丁目公設市場／新本町二丁目／栄田町／潮江町／愛宕町子供組 ／愛宕町大人組／帯屋町専門連鎖店／中種京町商店連盟／大橋通り商和会／本丁筋三丁目 ／本丁筋五丁目
第5回(1958)	魚の棚町内会／旭駅前若葉会／愛宕町商店連盟／朝倉会／菜園場商店連盟／本丁筋五丁目 町内会／越前町北町町内会／南洞ヶ島町／下街商店連盟／潮江商店連盟／江ノ口中水商店 連盟／東種町内会
第10回(1963)	南街地区防犯協会／帯屋町筋商店連盟／京町商店街／中種商店連盟／本丁筋四丁目町内会 ／紺屋町／帯屋町二丁目／旭街商店会／菜園場商店連盟／本丁筋五丁目町内会／愛宕商店 連盟／洞ヶ島町／帯屋町筋商店連盟／帯屋町一丁目／中種商店会／梅ノ辻町内会

第 20 回 (1973)	愛宕商連、万々商店街振興組合／京町・新京橋商店街踊り子隊／中種商振連／升形踊り子隊／上町踊り子隊／梅ノ辻町内会／帯屋町筋／大橋通り踊り子隊／高知市城山町
第 30 回 (1983)	愛宕商店街振興組合／京町・新京橋踊り子隊／帯屋町筋／万々商店街振興組合／大橋通り商店街振興組合／旭地区踊り子隊／南帯屋町振興組合／上町踊り子隊／中種商店街踊り子隊／升形踊り子隊／梅ノ辻町内会よさこい鳴子踊り子隊／菜園場商店街振興組合
第 34 回 (1987)	南帯屋町商店街振興組合／上町踊り子隊／中種踊り子隊／愛宕商店街振興組合／万々商店街振興組合／梅ノ辻町内会踊り子隊／協同組合帯屋町筋／旭地区踊り子隊／京町・新京橋踊り子隊／大橋通り商店街振興組合／升形踊り子隊／菜園場商店街踊り子隊
第 40 回 (1993)	中種商店街踊り子隊／大橋通り商店街振興組合／旭よさこい祭り実行委員会／京町・新京橋／上町踊り子隊／帯屋町ジュニア隊／協同組合帯屋町筋／万々商店街振興組合／升形商店街振興組合踊り子チーム／梅ノ辻町内会踊り子隊／菜園場商店街振興組合
第 50 回 (2003)	帯屋町筋／帯屋町筋ジュニア隊／上町よさこい鳴子連／本丁筋／大橋通りチーム／梅乃連（梅ノ辻町内会踊り子隊）／あたごまち愛組気炎一座／菜園場商店街踊り子隊さ組／京町・新京橋“ゑびすしばてん連”／旭よさこい祭り実行委員会
第 52 回 (2005)	上町よさこい鳴子連(52)／大橋通り踊り子隊(49)／梅乃連（梅ノ辻町内会踊り子連（41）／菜園場ストリート踊り子隊さ組（50）／あたごまち愛組気炎一座（42）／帯屋町筋ジュニア隊（18）／京町・新京橋“ゑびすしばてん連”（50）／帯屋町筋（52）／本丁筋（5）
第 54 回 (2007)	帯屋町筋／上町よさこい鳴子連／あたごまち愛組気炎一座／梅乃連（梅ノ辻町内会踊り子隊）／大橋通り踊り子隊／菜園場“菜の笑”さ組／京町・新京橋ゑびす・しばてん連／本丁筋／升形（with アクア）／万々商店街（万々歳）／帯屋町筋ジュニア隊
第 55 回 (2008)	帯屋町筋（170 人。55 回）／上町よさこい鳴子連（140 人。55 回）／あたごまち愛組気炎一座（150 人。44 回）／梅乃連（梅ノ辻町（2008）内会踊り子隊）（106 人。44 回）／大橋通り踊り子隊（120 人。52 回）／菜園場“菜の笑”さ組（108 人。53 回）／万々商店街（万々歳）（120 人。29 回）／京町・新京橋ゑびす・しばてん連（140 人。53 回）／本丁筋踊り子隊（100 人。8 回）／チーム升形 with アクア（150 人。29 回）／帯屋町筋ジュニア隊（170 人。21 回）

* チーム名変更多数有り／高知市に限定／34 回大会は第 1 回調査実施年。

* 南帯屋町商店街振興組合（おびさんロード）～1991 年、38 回大会（10）まで／中種商店街踊り子隊～1994 年、41 回大会（38）まで／旭よさこい祭り実行委員会～2004 年、51 回大会（43）まで／升形商店街振興組合踊り子チーム～42 回大会（29）まで／万々商店街振興組合～41 回大会（26）まで